

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・甲殻類
昆虫類
甲殻類
多足類
クモ目
軟体動物
扁形動物

(1) 扁形動物

扁形動物は日本には約 100 種が生息し、このうち、淡水棲と陸棲のウズムシ綱 Turbellaria に分類される種が埼玉県に分布・確認されており、これまでに淡水棲のいわゆるプラナリアは 3 科 5 種（不明種 1 種を含む）が、陸棲のコウガイビルは 2 科 7 種（不明種 1 種を含む）がそれぞれ記録されている。本書を刊行するにあたり、そこから外来種や迷入種などを除いた 10 種を対象に本県における生息状況を調査した結果、約 33% のプラナリア 3 種をレッドリスト掲載種とした。

これまでの扁形動物の掲載種数の変遷をみると、初版と改訂版、前版、そして今回もすべて 3 種で、その状況は変わっていない。しかし、今回調査対象とした中には、明らかに希少性が高いものの、未同定種であるということで選定されなかったオオウズムシの一種 *Bdellocephala* sp. がある。これまでのところ、県内では北本市内の湧水 1ヶ所でのみ生息が確認されているもので（北本市教育委員会市史編さん室，1990 など）、今後正確な同定がなされれば、リストに加えられる可能性が高い。

また、山岳地帯の冷涼な気候に生息するカズメウズムシとミヤマウズムシについては、既知産地で生息が確認できないなど、以前に比べて確実に生息環境が悪化している。これら 2 種の生息状況の悪化の原因として考えられるのは、地球温暖化に伴う年間の平均気温の上昇と、それに伴う水温の上昇、ニホンジカなどの野生動物が植物を摂食し、沢沿いの樹木に立ち枯れが生ずるなど、日照の変化等水辺環境の急激な変化も少なからず影響していると思われる。また、近年の登山ブームに伴い、多くの人が沢の源頭部である生息地周辺に立ち入ることになったのも原因の一つと考えられる。

一方、低山帯から山地帯にかけて比較的普通に見られるナミウズムシ *Dugesia japonica* Ichikawa et Kawakatsu も、低地帯から台地・丘陵帯における生息環境が変化しており、かつてナミウズムシが見られた環境に現在では外来種のアメリカツノウズムシ *Grardia dorotocephala* (Woodworth) が確認されるなど、その生息状況には変化が見られる（石井，2013）。

[付記] 次ページ以降の種ごとの解説において、形態や国内分布に関する項目は、佐々木（2002）、山田（1992）、同（1994）、同（1995）を参照した。

【目名・科名】	ウズムシ目ヒラタウズムシ科	埼玉県(2018)	VU	環境省(2014)	-
【和名】	カズメウズムシ				
【学名】	<i>Seidlia auriculata</i> Ijima et Kaburaki	指定状況	-		
【形態】	体長15～25mm、頭部に1対の飛び出した耳葉があり、非常に小さな眼点が100個以上、馬蹄形に列をなしている。体色はわずかに赤紫味を帯びた茶褐色から灰白色で、頭部と側縁は透明度が高い。				
【国内分布】	北海道、本州（中部地方以北）				
【主な生息環境】	本州（関東地方）では標高900m以上の低山帯から亜高山帯にかけて分布し、冷たい湧水やその流れ、あるいは清流の水際で、石の下に張り付いて生息する。肉食性で、水生昆虫等を捕食し、水温が年間を通して10℃を下回る環境下でしかほとんど生息できない。水温が上がると直ちに死亡する。				
【県内での生息状況】	旧大滝村（現秩父市）の雲取山や雁坂峠付近（標高900～1,000m以上）等で過去に記録があり（埼玉県, 2008など）、今回の調査では小鹿野町の河原沢諏訪山附近と秩父市の大滝地区バケモノ沢での生息が確認された（新井, 投稿中）。				
【特記事項】	県内の分布は、いずれも山岳地帯で水量が極めて少ない流水で源流付近の冷涼な環境であり、極めて局所的。生息地、個体数がかかなり少ない種と考えられる。				

【目名・科名】	ウズムシ目ヒラタウズムシ科	埼玉県(2018)	VU	環境省(2014)	-
【和名】	ミヤマウズムシ				
【学名】	<i>Phagocata vivida</i> (Ijima et Kaburaki)	指定状況	-		
【形態】	体長15～30mm、頭部に1対の斜め前方に飛び出した耳葉があり、頭部先端は丸みを帯び、耳葉の基部に1対の目がある。体色は灰黒色で、頭部と側縁は透明度が高い。				
【国内分布】	北海道、本州、九州				
【主な生息環境】	本州（関東地方）では標高700m以上の低山帯から山地帯にかけて分布し、冷たい湧水やその流れ、あるいは清流の水際にある石や落ち葉、流木等に張り付いて生息する。肉食性で、水生昆虫等を捕食し、水温が年間を通して10℃を下回る環境下でしかほとんど生息できない。水温が上がると直ちに死亡する。				
【県内での生息状況】	旧両神村（現小鹿野町）の両神山（標高750～1,020mの間）などで記録がある（埼玉県, 2008など）が、今回の調査では分布に関する新たな情報が得られず、これまで知られている山岳地帯の既知産地でも生息の確認ができない。				
【特記事項】					

【目名・科名】	ウズムシ目サンカクアタマウズムシ科	埼玉県(2018)	LP	環境省(2014)	-
【和名】	ナミウズムシ				
【学名】	<i>Dugesia japonica</i> Ichikawa et Kawakatsu	指定状況	-		
【形態】	体長20～25mm、頭部は三角形で、中央付近に1対の目がある。体色は淡い茶褐色から黒褐色と変化に富み、頭部から側縁にかけてはわずかに淡色。				
【国内分布】	北海道、本州、四国、九州				
【主な生息環境】	本州（関東地方）では低地帯から山地帯にかけて広く分布し、水質のBOD値が3ppm以下の清水環境下に生息し、湧水や河川の源流付近、清流の波立つ瀬の部分に見られる。				
【県内での生息状況】	山地帯では普通に見られ、今回の調査でも小鹿野町の河原沢諏訪山附近、秩父市の大滝地区中津川、同地区小倉沢、同地区バケモノ沢で確認され、さらに低標高地では秩父市の大宮地区押堀川、飯能市岩淵で生息を確認した（新井, 投稿中）。平野部での生息地が局所的で少ない。				
【特記事項】	近年、県内の平野部で生息が確認された外来種のアメリカツノウズムシ <i>Gardia dorotocephala</i> (Woodworth) は、一見、本種と良く似ているが、頭側部に長く尖る耳葉を持ち、その基部が明色であることで、本種と外見上区別することができる。				

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・円口類
昆虫類
甲殻類
多足類
クモ目
軟体動物
扁形動物